

No. 14

2004 - 5 - 25

日本蜘蛛学会



インフォメーション

第4回日本蜘蛛学会奨励賞

日本蜘蛛学会
第36回大会（愛知県）
のお知らせ

今回は奨励賞候補の推薦がなかったので、
「該当者なし」ということになりました。

（吉田 真）

日本蜘蛛学会の第36回大会は2004年8月27日から29日まで、愛知県豊橋市の豊橋市自然史博物館（〒441-3147 豊橋市大岩町字大穴1-238 豊橋総合動植物公園内）を会場として開催されます。多数の参加をお待ちしています。

27日（金）午後から動植物公園内で観察会
（豊橋市自然史博物館と共催）

28日（土） 9:00~12:00 一般講演
13:00~14:00 総会
14:00~14:30 自然保護委員会
14:30~16:30 シンポジウム
（豊橋市自然史博物館と共催）

29日（日） 9:00~12:00 一般講演
（講演数などにより時間が変更されることがあります）

問い合わせ先

〒441-3147 知立市山屋敷町東山10-6

緒方清人

Tel 0566-83-4474

E-mail neon_kiyotoi@ybb.ne.jp

（緒方清人）



同好会情報

ここでは日本各地にあるクモ同好会で発行されている定期行物の内容、採集会や講演会（総会・例会）の日程などを紹介する。興味を持たれた方は入会したり、行事に参加されてはいかがでしょうか。

三重クモ談話会（本部：橋本理市）

会報「しのびぐも」を年1回発行。採集会・合宿・例会などを年数回実施。

採集会は：

2004年5月29日（土）30日（日）鈴鹿市椿大神社・入道岳

6月13日（日）阿山郡阿山町

7月10日（土）11日（日）鈴鹿市小岐須溪谷

9月18日（土）19日（日）多気郡宮川村大杉谷溪谷

10月9日（土）鈴鹿市内

11月7日（日）一志郡白山町

12月5日（日）鈴鹿市内

2005年2月13日(日)いなべ市東員町
県内各地で毎回変わります。参加希望者は必ず1週間前までに事務局に連絡下さい。

総会兼同定学習会、懇親会は、2005年4月～5月に予定。詳細は後日連絡します。

しのびぐも 30号(2003.3.31発行)

内容は、遊絲12号を参照して下さい。

しのびぐも 31号(5月下旬に発行予定)

入会申し込み

〒515-0044 三重県松阪市久保町1843-157 貝發憲治(事務局)

Tel(Fax)0598-29-6427

会費 年3000円

和歌山クモの会(会長:米田 宏)

会報「和歌山クモの会会報」を年1回発行。
総会・観察会を年1回実施。

総会・観察会は2004年8月に予定。詳細は後日、会員諸氏に連絡します。

和歌山クモの会会報 No.13(2004.1.15発行)

新海 明:闇夜に浮かぶトリノフンダマシの網

米田 宏:クモに関する迷信や伝説(9)

米田 宏:「サオサシ」型ゲホウグモに初めて出会う

米田 宏:私のクモグッズ(1)

米田 宏:家蜘蛛になったナガコガネグモ

吉田 誠:セアカゴケグモの和歌山県における捕獲例

和歌山クモの会事務局:和歌山クモの会総会と観察会報告

入会申し込み

〒649-6264 和歌山市西浜465-3

第2小杉マンション1-A

青木敏郎(事務局)

Tel 090-1072-4414

会費 年1000円

東京蜘蛛談話会(会長:新海栄一)

会報「KISHIDAIA」を年2回、「談話会通信」を年3回発行。採集会年4回・合宿年1回・総会例会などを年2回実施。

今年度の採集会は、東京都青梅市「御岳溪谷」で実施します。

2004年 5月16日(日)

7月11日(日)

10月17日(日)

2005年 2月13日(日)

JR青梅線御岳駅 午前10時30分集合。

世話人 初芝伸吾(042-501-2651)

甲野 涼

合宿は、山梨県で行います。

期日:2004年7月24日(土)～26日(月)

宿泊:山梨県増穂町平林 赤石温泉

費用:1泊3食10000円×泊数+保険等2000円

申し込み締め切り:6月30日

申し込み、問い合わせ先:

〒192-0352

八王子市大塚274-29-603

新海 明

例会は、

2004年11月下旬の予定。詳細は後日連絡します。

KISHIDAIA 85 号 (2004.1.31 発行)

西野真由子：円網種 6 種の産卵・出のう・まど
い

新海 明：スズミグモの全国分布調査結果

新海 明・谷川明男：昔の名前で出ています(ク
モの古今の和名)

秋元維那・秋元 昇：ギンメッキゴミグモが上
を向く理由

DRAGLINES

高津佳史：沖縄本島クモウォッチング - 沖縄
クモ図鑑を持って -

高津佳史：ワカバグモの逆襲

高津佳史：今年も育苗ポットに巣を作ったキシ
ノウエトタテグモ

新海 明：ムレサラグモの網を発見

新海 明：ザトウムシが皿網に侵入

新海 明：無斑のヒラタグモを発見

泉 宏子：アシナガグモのはやにえ!?

谷川明男：ザトウムシに捕食されていたムツボ
シオニグモ

藤澤庸助：長野県クモ類目録

加藤輝代子：東京蜘蛛談話会 2002 年度観察採
集会報告 市川市小塚山・堀之内貝塚公園周
辺のクモ

入会申し込み

〒186-0002 国立市東 3-11-18-203

(有)エコシス 初芝伸吾 (事務局)

Tel 042-571-1012

E-mail: hatsushiba-ecosys@h8.dion.ne.jp

会費 年 3800 円 (学生 2000 円)

関西クモ研究会 (会長：山野忠清)

会報「くものいと」を年 2 回発行・採集会・

研究会例会などを年数回実施・

今年度の採集会は、

2004 年 5 月 30 日 (日)

9 月 26 日 (日)

いずれも三田市方面を予定・

例会は、2004 年 12 月 19 日 (日) に大阪市
の四天王寺高校で実施の予定・

くものいと 35 号 (2004.3.28 発行)

特集 環境指標としてのクモ

八幡明彦：里山の環境指標としてのクモ

宮下 直：新刊紹介「クモの網と巣の不思議」
- 多様な網とクモの面白い生活 池田博明編

吉田 真：「ささがに文化」の軌跡

加村隆英：同定指南 ワシグモ科
Gnaphosidae (その 7)

関西クモ研究会採集会の記録 大阪府箕面市箕
面公園 (2003 年 9 月 21 日)

関西クモ研究会 2003 年度例会の記録

清水裕行：東條清先生を偲ぶ小さな旅 (前編)

吉田 真：キシノウエトタテグモを我が家で採
集

勇介美術館「新しいペット」



関西クモ研究会 2003 年度例会の 1 コマ

クモリスト

西川喜朗：浜寺公園（大阪府）のクモ採集記録

池田勇介：浜寺公園（大阪府堺市・高石市）のクモ

西川喜朗：淡路島のクモ採集記録

研究・観察報告

船曳和代：マメイタイセキグモとキジロオヒキグモに今年も出会えた

田中穂積：庭で発見されたワスレナグモ - 第 1 報 -

吉田 真：水平円網を張るクモの山形県南部での生態的分布

海外の研究トレンド

榭元敏也：性選択がハエトリグモの多様性を促進する

吉田 真：ジグモ仔グモの分散跡を目撃

入会申し込み

〒567 - 8502 茨木市西安威 2 - 1 - 15

追手門学院大学生物学研究室内

関西クモ研究会

Tel 072-641-9550 (加村研)

Fax 072-643-9432 (大学教務課)

会費 年 1000 円

中部蜘蛛懇談会（会長：緒方清人）

会報「蜘蛛」を年 1 回、「まどい」を年 3 回発行。採集会を年 2～4 回。総会・研究会を年 1 回実施。

採集観察会は、

2004 年 6 月 6 日（日）

豊田市自然観察の森 担当者 緒方清人

現地 センター前 午前 9 時 30 分 名鉄名古屋

屋本線知立駅改札口 午前 8 時 15 分集合

2004 年 9 月上旬

豊田市トヨタの森 担当者 大原満枝

2004 年 10 月

岐阜市金華山 担当者 永井 均

総会・研究会は 2005 年 2 月 11 日に実施。

蜘蛛（KUMO）36 号（2003.10.18 発行）

内容は、遊絲 13 号を参照して下さい。

入会申し込み

〒444-0075 岡崎市伊賀町 4-62-3

板倉泰弘（事務局）

Tel 0564-28-5857

E-mail : yasuhi@deluxe.ocn.ne.jp

会費

正会員 年 3000 円（高校生以下 1000 円）

準会員 「まどい」のみ 1000 円



中部蜘蛛懇談会 2003 年度総会・研究会の 1 コマ

関西クモゼミ

しばらくの間、休会中。

東京クモゼミ

毎月 1 回、第 1 日曜日に千葉県市川市の加藤

宅で開催．会費などなく誰でも参加できる．

連絡先 新海 明 0426 - 79 - 3728

または、加藤輝代子 047 - 373 - 3344

言いたい！聞きたい！



スパイダーウオーズ外伝 No.132-134 エクアドル紀行 10-12

吉田 真

ここに来てから、僕の頭はメルヘンチックになっている。二日前には、魔女に呪い殺されそうになった夢を見た。今夜は、僕は黒人の子供。病気がちで引っ込み思案の子供だった。僕には一人の姉がいた。美しい少女だが、不治の病に冒されていた。夜中にふと目覚めると、姉は屋根から飛び降りるところだった。「姉さん、死んじゃいやだ！」と僕は叫ぶ。「あたしが長く生きていられないことを知ってるくせに。姉さんは苦しいのよ」「でも、いやだ。絶対に死なないで！」

びっしょりと汗をかいて、僕は目覚めた。全く何という夢を見るのだろうか。とてもおじさんの見る夢とは思えない。雨が静かに降っていた。まるで、アマゾンではこんなにも静かに雨が降ることもあるんだと、私に教えてくれるように...

いよいよ、カパウイを離れる朝が来た。雨で飛行機の出発が遅れるという。ここは完全な有視界飛行だから、天気が悪いと離着陸が困難なのだ。待つほどもなく雨は上がって、私たちクモ班は先発隊として8人乗りの小型機に乗った。

見渡す限り、森ばかりである。その間をアマゾンの支流・パスタザ川が蛇行し網の目の水路

を形作りながら、ゆっくりと流れる。人家も道路も全くみえない。アチャアル族は道を造らず、その集落が発見できないほど、人口密度は低いのだ。彼らは完全にアマゾンの森に溶け込んでいる。ジャガーやピューマや、その他多くの動物と同じように。飛ぶこと約1時間、ようやく点在する人家と道路がみえてきた。文明の爪痕である。

飛行機を乗り換えるために降りた町で、時間待ちの間に、私たちはクモを採集することにした。でこぼこ道を15分ほど走った川べりで、私はトラブルにあった。カメラの入ったバックを盗まれたのである。小雨が降っており、誰もいないと思ったので、私は山道のそばにザックを隠し、その上にレインコートを掛けておいた。5分ほど目を離して採集していた隙に、やられたのである。

私にとっては、カメラも惜しいが、カパウイで採集したクモの標本と、社会性のクモを調べたノートの方がもっと惜しい。しかし、盗まれてから何を言ってもしょうがない、ここは日本ではないのだ。油断する方が悪い。警察に盗難届をした後で、私たちは再び飛行機でキトに向かった。

キトの空港には、ガイドのパブロさんらが出迎えてくれた。落ち込んでいるときに、彼の顔を見るとほっとする。「ヒトの物を盗る奴がいるのは、同じエクアドル人として恥ずかしい。しかし、起きてしまったことは仕方がない。元氣を出せ」という。陽気で頼もしいエクアドリアンである。

クモ班以外の後発部隊はまだ着いていない。カパウイの雨がひどく、飛行機が離陸できないらしい。仕方がないので、我々だけで最後の目的地カヤンベに向かう。標高300mのオリエンテ（熱帯低地）から来ると標高3000mのシェ

ラ（中央アンデス）は空気が薄く、寒い。カヤンベは花の町である。あちこちに温室があり、バラなどを栽培している。日本にも輸出しているという。そしてようやく、最後の宿泊地、ホテル・サンルイスが見えてきた。

エクアドル紀行 11

ホテル・サンルイスはまるで公爵のお屋敷。広い農園のなかに建物が並んでいる。玉突きなどができる娯楽室があり、テニスコートやプールまであるのには驚いた。治安が悪いので、外国人向けのホテルはこのようなところが選ばれるそう。実際、5年ほど前にカヤンベを訪れたアミーゴ黒田の奥さんと娘さんは、とんでもない目にあっている。銃を持ったギャングの団にバスが乗っ取られ、ホテルまでの長い道のりをとぼとぼと歩いたらしい。

ここは標高約 3,000m。空気が薄く、ひどく寒い。いままでは心身ともに絶好調であった僕だが、ここに来て高山病にかかったらしい。頭が痛く、ちょっと歩いても息が切れる。こんな時にテニスをやったら、死んでしまう。アンデスで高地トレーニングをやった高橋尚子は化け物だ！そんなしんどい思いをしたら、平地で 42 キロ走るなんて楽なものかもしれない。どんな食べ物でもノー・プロブレムであった僕が、食べ物を受け付けなくなった。これも高山病の症状らしい。信じられないことだが、4 日間のカヤンベ滞在で、僕は 3 キロやせた。念願のダイエットが果たせたわけだが、喜んでいる余裕もない。

翌日、みんなはカヤンベ山に出かけたが、僕とやはり調子が悪い船曳さんはホテルで休むことにした。サンルイスの従業員の多くは英語を話さないで、なかなか大変である。あまりにも寒いので、身振り手振りで、部屋の暖炉に火

を付けてもらったり、水しか出ないシャワーを直してもらった。図書室で見つけた本には、「カヤンベ山は、緯度と気温が同時にゼロになる世界で唯一の地点である」と書いてあった。要するに、赤道直下であっても、これだけ高いと寒いのだ。

カヤンベ山に上った連中は、ブリザード（吹雪）に遭遇した。ここでも元気な谷川さんは、止めるガイドを振り払って、標高 4,300m まで登ったらしい。一つ間違うと、遭難しかねない。谷川さんらは、そこで妙な集団に出会った。変なお面を付けて着飾った男たちが、大きな氷を抱えて、山を駆け下りてきたのである。これは、年に一度のカヤンベのお祭り。より大きな氷を抱えて早く降りた方が勝ちだという。いろんな祭りがあるものだ。



赤道 8月 雪

夕方に、我々と一日遅れて、後発部隊が到着した。大雨が降って、土の滑走路が使用できず、彼らは昨夜もアマゾン源流のカバウイに泊まったらしい。トラブルは重なるものである。途中で数名のリュックサックが行方不明になった。まさに「泣き面に蜂」。乗り換えるときに荷物の積み卸しを監視していないと、発展途上国ではこういうことがよく起こるらしい。

三日目は、クイコチャ湖へ。河口に水がたまった典型的なカルデラ湖である。青く澄んだ湖水を見ると、心まで洗われるようだ。湖畔の博物館で、魚を捕る投網・刺し網・梁（やな）を見た。近くに住む黒人たち（スペイン人によって、労働力としてアフリカから連れてこられた人たちの子孫）が使ったものらしいが、日本のものとそっくりである。これも、文化の「平行進化」の産物であろうか？

帰途に立ち寄った町には、馬に乗った武人の大きな銅像があった。スペイン人と戦ったインカの将軍だという。それにしても、行方不明になったインカの莫大な財宝はいまどこにあるのだろう。インカの首都・クスコの地下に眠っているのか、それともアマゾンの奥地に運ばれたのか？「それは誰にも分からない」とパプロが言う。

エクアドル紀行 12

キトへ戻る途中、河のそばに車を止め、休憩を取った。上り坂が多く、エンジンがオーバーヒートしているらしい。電線や木の枝のあちこちに、栗のイガのような黒いものがついている。直径は30センチほどか。「となりのトトロ」でこんな奴を見たような。これはなんとサボテンの仲間の着生植物で、たくさんつくると電線がその重みで切れたりするらしい。

乾季なので河の水量は少ないが、万年雪をか

ぶったコトバクシなどの山々からいつも雪解け水が流れてくるという。極度に乾燥して埃っぽい河原には、無数のブユが飛んでいた。吸血性の厭な虫で、咬まされると痛い。河原に座り込んで石の下の虫を採集している加村さんの周りには、100匹以上のブユが集まっている。僕はとてこんなところに座り込む根性はない。走ってブユを振り切ると、人型のブユの残像ができる。いやはや恐ろしい！この河原には数万匹、いや数十万匹のブユがいるのかもしれない。

船曳さんがここでとんでもないものを見つけた。ハイイロゴケグモである。セアカゴケグモの「名声」に隠れてあまり有名ではないが、日本でもあちこちで見つかり、沖縄では急速に増えている。日本ではどちらも、道路側壁の水抜き穴や側溝など、隠れ家のある人工物に潜っており、河原など自然の場所では見つからない。中南米はゴケグモ類の故郷と言われているから、ここはハイイロゴケグモの本来の生息場所なのであろう。からからに乾燥した「糞（さい）の河原」。このまがまがしい毒グモに、これ以上ふさわしい場所が他にあるのか？



キト近くの河原にいたハイイロゴケグモ

ようやくキトに帰り着き、セバスチャンホテルでつかの間の休息。この最後の晩に、ツアーを企画した現地の旅行会社が、近くのレストラ

ンでさよならパーティを開いてくれた．ずっと世話してくれたガイドたちに乾杯！ケエナ（縦笛）やギターを持った5人のグループが、私たちのためにラテンの音楽を演奏してくれた．最後の曲は「コンドルは飛んでいく」．18世紀に、インカ皇帝の末裔を名乗ってスペインと戦った男の歌である．

出国は大変だった．入国はフリーパスだったのに、出国審査の係官はやたらうるさかった．このアバウトな国でも、お役人はそうではないということか．政府の許可を得て採集したクモなどの標本も、見つかったら没収されるという．ナマケモノの毛皮や生きたタランチュラをスーツケースの底に隠したAさんやBさんは、気が気でなかったであろう．Aさん、Bさん、君たちが足止めされたら、僕たちは先に帰るからね、バイバイ！

ヒューストンで乗り継ぎ．ここまでくると、緊張が緩む．エクアドルのお菓子はまずかったので、ここでお土産を買おう．いろいろと迷った末、免税店でチョコレートを買った．空港内で解団式を済まし、成田行きの飛行機へと急ぐ．途中の通路で「Tax Free！ メンゼイヒン！」と叫んでいるおっさんがいた．こらこら、こんなところで商売したらあかんやろが！

隣の席に座ったおもしろいお兄さんとおしゃべりしていると、先ほどのおっさんが乗り込んできて「ミスター・ヨシーダ！メンゼイヒン！」と叫ぶ．オー、マイ・ゴッド！免税店で買ったチョコレートの受け取りを忘れていたのだ．「I'm very sorry I forgot it!」と謝ると、おっさんは「I never forget it!」と怖い顔で僕を睨んだ．こうして、僕のエクアドルの旅は終わった．それにしても日本は暑い．アマゾン源流よりはるかに暑い日本の夏に、すぐにばてる自分が情けない．

求む サカグチトリノフンダマシ

谷川明男

三重県の熊田憲一さんから写真のような雄の標本をいただいた．明らかにトリノフンダマシ類の雄である．しかし、オオトリノフンダマシでもトリノフンダマシでもシロオビでもアカイロでもない．とすると、まだ不明のツシマトリノフンダマシかサカグチトリノフンダマシの雄かもしれない．しかし、雌と一緒に採集されたわけではない．そこで、DNA比較によってその可能性を探ろうと考えた．幸運なことに、その直後、東京大学の馬場友希さんが奄美大島でツシマトリノフンダマシの雌を発見し、その標本を研究用に提供してくださった．



なぞの雄

さっそく、台湾の東海大学の卓逸民さん張永浩さんをお願いして、両者のミトコンドリアDNA内のCOIという部分を比較検討していた．彼らの経験からいって、もしも同種ならば塩基配列の違いは20%以内におさまることが多いという．しかし、分析の結果、私が送った標本のDNAの塩基配列の違いは20%を超えていたので、両者は同種ではないだろうということであった．

とすると、この雄はサカグチトリノフンダマシの雄かも知れない。しかし、サカグチのメスの新しい標本がない。嗚呼。

そこで皆さんにお願いします。もしもサカグチトリノフンダマシの雌を発見されましたら、ぜひDNA分析用にご提供ください。残念ですが、標本をお返すことはできません。たいへん珍しいクモですが、意義をご理解の上、ご協力いただければありがたいです。また、写真の雄は分析用に全身をすりつぶされてしまいましたので、この世にはもはや存在しません。この写真のような雄を採集されましたら、こちらも研究用標本としてご提供いただければ幸いです。研究終了後は国立科学博物館に収蔵させていただきます。

連絡先

113-8657 東京都文京区弥生 1-1-1
東京大学大学院農学生命科学研究科
生物多様性科学研究室
谷川明男
E-mail : dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp



日本各地で採集された、稀産種や分布上の重要種などについての情報を掲載する。これを読み、「私もこんな種類を採集しているぞ」という方はその情報を是非お寄せいただきたい。

ツシマトリノフンダマシ

鹿児島県奄美大島湯湾岳公園 2003年6月20日 成体1 馬場友希
鹿児島県奄美大島住用村市(イチ) 2003年6

月24日 (令不明) 小野広樹採集



奄美大島のツシマトリノフンダマシ

キジロオヒキグモ

兵庫県姫路市刀出 2003年8月6日 幼体
1 船曳和代

マメイタイセキグモ

兵庫県姫路市太市 2003年7月17日 幼体
2 船曳和代

愛知県豊田市加茂川町 2003年7月13日
幼体1 杉山時雄

愛知県岡崎市古部町 2003年7月21日 幼体1 杉山時雄

スズミグモ

石川県かほく市高松町 2003年8月 成体
1・卵のう 斎藤慎一郎

東京都八王子市八王子城跡 2004年1月10日
幼体多数 新海 明

リュウキュウオニグモ

鹿児島県徳之島三京林道 2003年3月11日
成体2 3 3月13日 成体1 1 馬場友希(徳之島新)

ヤンバルオニグモ

鹿児島県徳之島三京林道 2003年3月13日
成体1 馬場友希(徳之島新)

オオスミコガネグモ

鹿児島県屋久島屋久町 2003年6月26日

成体 1 馬場友希

カトウツケオグモ

鳥取県国府町 2003年10月30日 幼体 初
芝伸吾



鳥取県国府町のカトウツケオグモ

隠岐郡五箇村大字山田 岳山林道（環境庁メッシュコード5433-32-50）2003年8月25日（体長12mm）吉岡武雄

鳥根県美保関町森山字寺床（環境庁メッシュコード5333-21-56）2004年2月20日（体長10mm）河野正

鳥取市西町3丁目 1999年7月19日（令は不明）松下理一

（新海 明・谷川明男）



「池田博明（編）池田博明・新海明・谷川明男（共著）

クモの巣と網の不思議．多様な網とクモの面白い生活．

文葉社（東京）183 pp.

ISBN 4-902254-02-6 2400 円

すでに Acta Arachnologica 誌 (Vol.52, No. 2, pp.134-135) のほうに宮下直氏による書評が出ているが（同氏による本書の別書評が2004年3月発行の関西クモ研究会の「くものい」と誌, No.35, pp.1-13にも出ている）,「遊絲」編集部から機会をいただいたので、私も書評を書かせていただくこととなった。私はクモファン歴こそ長い（年数だけはすでに35年以上）本書にかかわる内容では一度も自分で研究らしきものをした経験がない。宮下氏の書評が、自身も本書の内容に深く関わる仕事をしてきている（本書にも同氏の名前が再三登場する）内野からのものだとすれば、私のものはまったく外野からの書評であり、編集部が期待しているはずの販促に役立つかどうかあやしいが、著者にも本書の読者にも、そして、まだ本書を買っていない人にも、一読いただければ幸いである。

内容は、タイトルのとおりクモの網の構造と機能やその進化に焦点をあてたクモの生活の紹介である。文章は平易で、研究上のエピソードが随所に織り交ぜられており、あきずに一気に読み通せた。クモがなぜ網にかからないのか（pp.48-51）とか、オナガグモの糸網に粘性がないことを確認するまでの研究過程（pp.62-64）（いずれも新海さん担当）などは、自然観察の心構えはこうあるべきというメッセージも込められて、なかなか教育的でもある。

網の標本（船曳和代さん製作）の写真、粘着糸などのSEM写真（梅林力さんによる）、クモの写真（多くは谷川さん撮影）も豊富に効果的に使用されており、本書の価値を倍増させている。円網や三角網はともかく、立体的であるはずの不規則網やドーム網がなぜあのような平面の標本として不自然さを感じさせない状態で美しく収まるのかじつに不思議である。

他にも、よい工夫だと感心したところはいろ
いろあるが、なかでも、編者の池田さんによる
第1部の入門編でのクモの網の概説は実に巧み
な導入だと思った。ここでは、身近でよく見ら
れる網を10タイプに分けて紹介しているが、
それぞれに「垂直円網 - 包み上げ式」、「水平円
網 - かみつき式」、という具合に、小見出しに餌
の捕獲方法が併記されており、網の構造と餌の
捕獲方法にそれぞれかなり密接な対応があるこ
とにすんなりと気づかせてくれる（ウズグモや
ガケジグモのようないろいろなタイプの網を
「篩板系網 - からみつき式」で一括りにするの
はちょっと潔すぎるという気がしないでもない
が）。

最終章である第5部の途中から唐突に始まる
のがちょっと奇異だが、写真の撮影法や網標本
の作り方などが掲載されているのもよかった。
そろそろデジタルの一眼レフに切り替えたいと
思いながら、撮影倍率などの問題で小型の節足
動物の接写についてはオリンパス OM-4 からま
だ離れない私には、すでにデジタルに切り替
えられたという谷川さんの写真撮影法の記事
（168-172）は、本書の中でもっとも読み甲斐
があった記事の一つである。

自称クモファンの私であるが、知らない（あ
るいはどこかで見ていたはずなのだがすっかり
忘れていた？）話もいろいろとあった。たとえ
ば、コオニグモモドキが円網を張らないこと
（pp.83-84, 谷川さん）とか、キンヨウグモは
幼体のときには円網を張るが親になると張らな
くなること（pp.86-87, 新海さん）とかは、そ
れぞれ私の頭の中で80ヘエを超えた。また、
本書の表紙や扉にも使われている谷川さん撮影
のアミナゲグモ *Menneus* が投網を拡げている
写真を引き伸したパネルを私は研究室に飾って
いるが（2002年の鹿児島大会のときに谷川さ

んから購入したものである）私はこのクモをこ
れまでずっとメダマグモ *Deinopus* だと思いこ
んでおり、来客者にもそう説明していた。した
がって、池田さんや谷川さんらがオーストラリ
アで初めてこれを見たときに最初メダマグモと
勘違いした（p.100）というのを読んで初めて
この勘違いに気づいた私は70ヒエーほど血の
毛が引いた。だまされた気分であるが（いや、
私が勝手にメダマグモだと思いこんでいただけ
なのでこれは無論正しくないのだが）池田さん
たちでさえ勘違いしたなら、私の勘違いも別に
恥ずかしくないはず、と気を取り直した。

さて、かように、内容の質の高さや面白さ、
そして、この分野の今後の研究に対する手引き
としての有用性では文句なしに推奨できる本
（まだお持ちでない方は是非買しましょう！）
であるが、こうすればもっとよかったはずと思
うところが皆無だったわけではない。大きくは
次の3点である。まずは、たぶん平易さを打ち
出そうという目論見で意図的にそうしたものと
思われるのだが、本文中で文献引用が省略され
ているのは私にはいただけない。巻末に参考文
献はある程度列挙されてはいるのだが、本文中
のそれぞれの記述の拠り所がどの文献なのかを
知りたいときに、きわめて不便である。もしか
すると既存文献には記載がなく、本書で初めて
明かされている観察なども含まれているかもしれ
ないのだが、それがどこであるかもわからない
本書について私がかつてもっとも残念に思うのは、
この点である。

2点目は索引がないこと。クモの種名や主要
な事項の索引は是非とも欲しかった。またその
索引のところへ併記するだけでよかったのだが、
種の和名には一度でよいからどこかで学名を表
示しておいてほしかった。たとえば、和名でコ
ケオニグモ、ヤマシロオニグモ、サツマノミダ



マシと書いただけではわからない最後の2種の類縁性が、学名が表示されていればわかるからである(種の学名には、属名がついて回っているので). アミナゲグモ(p.100)とか、ムレハグモ、ムレアシブトヒメグモ、ムレクサグモ(p.135)などの国外産の種にはとりわけ学名をつけるべきだったと思う(これらの和名は既存のものだとはいえ、使用機会が限定されるため、国内産種の和名と比べるとはるかに普及していない). 3点目は、巻末に、本書に登場する種を中心に簡単なものでもよいから分類表をつけて欲しかったということである。クモの図鑑や他書を見ればすむ問題ではあるのだが、本書を最初に出会う手引きとしてクモの観察をスタートしようという初心者には本書に分類表がついていれば何かと有益であったに違いない。

別種か同種かという問題に日頃から向き合っている分類研究者の一人として、どうにも舌足らずな表現としか思えない文章が1点、p.125のBox記事の第3段落にある。「体の形態が似

ていても、触肢の構造が違えば別種です」である。2つの型が別種かどうかは両者間で生殖隔離があるかどうかが決める手なのであって、いかなる形態の違いもその事実のみでは別種の根拠にも説明にもならない。交尾器の形態も種内で地理的に変異するし、同一種の同一集団内でさえ交尾器が多型を示すことがある。たとえば、アリツカムシ類では交尾器の2型現象が知られているし、ユウレイグモ科でも雌の交尾器の2型が知られている(Huber & Perez-González, 2001)。ハエトリグモの1種 *Maevia vittata* には婚姻ダンスが異なる2型雄が(Painter, 1913)、サラグモ科の1種 *Oedothorax gibbosus* には頭胸部の形態も配偶行動も著しく異なる2型雄が知られている(Maelfait et al., 1990)。スペースの限られたBox記事とはいえ、ここは説明を端折ってほしくなかった。もうひとつ、この段落の後半には、「(マミジロハエトリとマミクロハエトリの雄の触肢脛節の突起をさして)ハエトリグモの場合、この位置の突起は交尾という機能上、たいして重要な役割をしていません。機能上、重要でないところは早く進化すると思われます」という文章があるが、もしそうであれば、その突起はマミジロハエトリとマミクロハエトリのそれぞれの種内でもばらばらに多様化していてもよさそうである。それぞれの種内ではその突起の形態が安定していることはどのように説明するのだろうか。この段落は、かように説明不足であるので、むしろないほうがよかった、と思う。

最後に誤植と思われるところや、上記以外でちょっと気になった表現を気づいた範囲で記す(矢印以下がコメント):

p. 12 最上段 円網をはるクモが列挙されているが、ウズグモを記すのを忘れている。

p. 15. 「(ツクネグモについて)体を小さくす

ることで天敵の目を逃れてきたのでしょうか」
 本当か？ 根拠は何？
 p. 17 Box 最下行 唾液線(誤) 唾液腺(正),
 額葉(誤) 顎葉(正)
 p. 79 「サムエル・ジョッケ」 Samuel
 Zschokke はサムエル・チョッケ(またはショ
 ッケ?)だろう。ジョッケ(Jocqué)はベルギ
 ーのクモ分類の研究者。
 p. 102 「ヒメグモ科のシノタクシス属」
 Synotaxus 属は現在はヒメグモ科ではなく,
 Synotaxidae(ヤセヒメグモ科)とされている。
 p. 127 下から6行目 「貯精のう」(誤) 「受
 精のう」(正)。「貯精のう」はふつう“雄”の輸
 精管に付属する,精子を一時的に貯める器官を
 さす用語である。混乱を避けるためには,“雌”
 の体内にある移精された精子の一時的貯蔵器官
 は「受精のう」と呼ぶほうがよい(ここで受精
 が起こるわけではないのに,「受精のう」と呼ぶ
 のは変だと私もかつて思っていたが,この用語
 は,たぶんここで“受精がおこる”ではなく“精
 子を受ける”という意味で名づけられたものな
 のだろう)。

文 献

Huber, B. A. & Perez-González, A. 2001.
 Female genital dimorphism in a spider
 (Araneae: Pholcidae). J. Zool., London,
 255:301-304.
 Maelfait, J. -P., de Keer, R. and de Meester,
 L. 1990. Genetical background of the
 polymorphisms of *Oedothorax gibbosus*
 (Blackwall) (Linyphiidae, Araneae).
 Rev. Arachnol., 9:29-34.
 Nomura, S. 1991. Systematic study on the
 genus *Batrisoplisus* and its allied genera
 from Japan (Coleoptera, Pselaphidae).
 Esakia, 30: 1-462.

Painter, T. S. (1913) On the dimorphism
 of the males of *Maevia vittata*. Zool. Jb.
 Anat., 35:625-636.

鶴崎展巨(鳥取大・地域学部・生物)

最近気がついた分類関係の文献

最近発表された日本のクモの分類に関連のあ
 る論文をいくつか簡単に紹介する。

Ono, H. & Matsuda, M. 2003. Discovery
 of *Oxyptila atmaria* (Araneae: Thomisidae)
 from Japan. Acta Arachnol., 52:79-81.

Oxyptila atmaria (Panzer 1801)アトムオチ
 バカニグモを日本から記録した。

Tanaka, H. 2003. A new species of the
 genus *Pirata* (Araneae: Lydosidae) from
 Hokaido Japan. Acta Arachnol., 52:83-84.

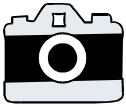
Pirata hokkaidensis Tanaka 2003 ミズベ
 コモリグモを新種として記載した。

Ihara, Y. 2003. Geographic
 differentiation of the *miyosii*-group of
Cybaeus (Araneae: Cybaeidae) in western
 Japan, with descriptions of two new
 species. Acta Arachnol., 52:103-112.

Cybaeus kunisakiensis Ihara 2003 クニサ
 キヒメナミハグモと *Cybaeus tsurugi* Ihara
 2003 ツルギヒメナミハグモを新種として記載
 した。

松田まゆみ・堀 繁久・石田裕一 2004. 野
 幌森林公園のクモ相。北海道開拓記念館調査報
 告, 43:11-32.

Nipsa barbatus Eskov 1993 アゴヒゲサラ
 グモと *Walckenaeria atrotibialis*
 (O.P.-Cambridge 1878)スネグロヌカグモとを
 日本から記録した。(谷川明男)



ギャラリー



『謎の幼体』

沖縄島の与那覇岳で撮影した。このクモの肢先の上爪は、2本のうち1本がとても長い。こんなクモが日本にいるのだとびっくり。残念ながら幼体だったのでそれ以上のことは何もわからない。しかも、不明グモの標本箱を見ていて気がついてみると、10年ほど前にも奄美大島でこのクモと同じと思われるものを採集していた。いったいこのクモの正体は何なのだろうか。

(谷川明男)



編集後記

若葉もすっかり伸びきり、クモの観察や採集のよい季節になってきました。先日、山梨県内のとある神社で、オオセンショウグモの雌雄4～5頭と出会うことができました。あらためて「いるところには、いるものだ」という感想をもちました。

会員諸氏もこれからの季節にクモとのさまざまな出会いがあると思います。それら各地のクモの採集記録や観察記録を気楽に投稿していただけたら幸いです。

(新海 明)

原稿送付先

〒192-0352 八王子市大塚 274-29-603

新海 明まで

E-mail では dp7a-tknw@j.asahi-net.or.jp (谷川明男) まで

発行は、年2回(5月、11月)の予定。締切は発行月の前月末日です。

日本蜘蛛学会

入退会は

庶務幹事

〒990-2484

山形市籠田 2-7-16

吉田 哉

Tel: 023-643-0097

Fax: 023-645-0698

E-mail: araneae@mb.njoweb.ne.jp

会費の問い合わせ及び住所変更は

会計幹事

170-0004 豊島区北天塚 3-12-21

笹岡文雄

E-mail: spydm@big.or.jp

Tel 03-3918-1945

年会費 正会員 7000円(学生は5000円)

郵便振替口座 00970-3-46745

図書幹事 渡部 健

ホームページ: <http://www.asahi-net.or.jp/~hi2h-ikd/asjapan/index.htm>

遊絲 第14号

2004年5月25日発行

編集者 新海 明, 谷川明男, 池田博明

発行者 日本蜘蛛学会 会長 吉田 真